

タ リ タ ・ ク ム

# “Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第15号

2011年1月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL03-5228-3171

発行責任者: 大岡左代子

## 教会だからできること

釧路聖パウロ教会 (北海道教区)

司祭 コルベ 下澤 昌

昨年もいろんなことがあった。その中でつくづく感じたことは、教会は優しさと思いやりを体現する共同体でありたいということだ。今さら子どもじみたことを言うなど叱られそうだが、実際、そのことを教えてくれたのは私の保育園の子どもたちだった。

ある日、園長室の前にある子ども用のトイレから声が聞こえてきた。年長児が二人一緒にウンチをしていた。一人が先に用を済まして、その子は後始末のために大声で先生を呼んだが、なかなか先生がやって来ない。すると、隣にいた子が、「先生を呼んできてあげる」と言うなりウンチを中断し、パンツを上げて呼びに行ったのだ。その子が先生を連れて帰って来ると、「ありがとう」、「はい」というやりとりがあって、途中の子は再びしゃがみ込んだ。この何の迷いもない、小さくて爽やかな優しさに私は感動し、涙が出そうになった。一体、他人のために自分のウンチを中断できる大人が何人いるだろうか。イエスが、「子どものようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」と言った言葉の意味が分かったような気がした。イエス様は、人のためにウンチを中断できたお方なのだ。私は、教会に集う人は、基本的に優しく思いやりのある人が多いと信じている。宣教論などというややこしいことを言わなくても、優しさや思いやりを、教会の中だけで発揮せず、この世の中に向けて行けないものかと単純に模索したい。

さて、礼拝のことを少し勉強すると、現在の祈祷書が初代教会への回帰を求めて作られているという解説に行き当たる。何が回帰なのかというと、例えば「平和の挨拶」だ。確かにあれは心がこもっていれば抱き合っても握手をしても気持ちがよい。しかし、多くの人が経験しているように、中には機械的に握手をしたり、相手の目を見るどころか、手が触れたかと思うと顔はあさっての方を向いているというような事態が起こる。ほんの数秒でさえ、目の前にいる人を受け入れられないという人間の悲しい現実が、こともあろうに聖餐式の中で露見してしまう。初代教会に申し訳ないと思う。

そもそも初代教会とは何なのか。私にはさっぱり分からないのだが、一つだけ、私が注目している初代教会の姿がある。それは、古い時代の教会の遺構から発見された大量の靴や衣類の断片であったり、それらの在庫リストの存在である。どうやら当時の教会は、不要な品物などを信徒が教会に捧げ、それを管理して逆に人々に再分配していたらしい。教会は祭儀の場であるとともに、相互扶助のセンター的役割を持っていたことが考えられるという。祭儀と相互扶助が有機的に結びついていたのだ。今の日本の我々のように、教会が社会的な少数者であった時代である。これは、教会が社会問題に手を出しているというようなケチな話しではなく、教会がそこにあり続けるための必然的な姿だったのである。

回復するならこの姿勢であろうと私は思う。保育園で仕事をしていると、小さい子を抱える家族の実態に愕然とすることがある。親も子も、未来に何の期待もしていないのである。施設を持つ教会の牧師や信徒は、この現実をイヤと言うほど味わっているはずだ。格差社会と言われ、いまは無縁社会の実相が問題になっている。多くの人々が、子ども時代から閉塞感を持ち、「繋がり」を失って孤立し、喘いでいるなかで、教会は再び必然的な行為として、それらの人々と繋がっていくべきではないか。持ち前の(?)優しさと思いやりを、発揮して行く時ではないだろうか。



画の説明：五つのパンと二匹の魚

## アフーマティブアクション

管区事務所総主事 司祭 ヨハネ 相澤牧人

もう 10 年くらい前になるでしょうか、アフーマティブアクション (affirmative action) という言葉を教えられました。積極的差別是正措置と訳される (ような) 言葉なのだそうです。

タリタ・クムに原稿を書くようにと命じられ、テーマは「教会の意思決定機関への女性の参画について」と言われました。なんとまあ難しい、しかし大切なことと思わされるテーマなのだろうと感じました。そしてすぐに頭に浮かんできたのがこの言葉でした。

聖公会の教会の様々な場での意思決定機関において、女性の参画はどれほどあるのかということはここ数年の課題として挙げられているものです。しかしここにはそう簡単ではない問題が潜んでもいることが考えられます。

2009 年度の日本聖公会の統計 (2010 年度は 4 月にならないとまとまりませんがそう変わりはないでしょう) を見ますと、聖公会の在籍信徒は 53,694 名です。そのうちの女性は 31,585 名で 58.8% となります。教会委員、教区会代議員の選挙権を持つ現在受聖餐者は 18,214 名です。女性は 11,720 名で 64.3% となります。日本聖公会の信徒は女性が 6 割強おられるのです。しかし、多くの教会、教区会、管区の総会での女性の委員、代議員として選ばれる方は数えるほどであるというのが現状です。もっとも私が牧師をしていたひとつの教会では、教会委員の定員 7 名のうち女性が 5 名ないしは 6 名でありました。それゆえその教会ではもっと男性をとの声があったこともありました。でも、教区会代議員は 2 名を選出することが出来る規模の教会なのですが、男性が選ばれているのです。ここには何があるのかと言うことでしょう。

数字から見ると、女性がもっと多く選ばれて良い状況です。しかしそうはならないことが現実には起きているのです。意思決定機関に女性の参画を、と言われ続けているにも関わらず、それほど大きな変化が起きないのは何故なのでしょう。多くの教会で選挙権

を持っている信徒の女性の割合は 50%。60%となっているのではないのでしょうか。その選挙権を行使するとき、どんなことを考えておられるのでしょうか。

私にはもうひとつの経験が思い出されます。それは女性の司祭の問題の賛否が活発に議論されていた頃、信仰生活が長い、年を重ねた女性の信徒が、司祭さんが男か女かは私にはよくわかりません。どちらでもいいから、とにかく良い司祭さんがほしいです、と言われたことが耳に残っています。性別と言うことよりも本質を問う鋭い問いかけであると思います。

さて、意思決定機関に女性が今よりも多くいるということは、その判断の幅が広がることで期待されるのではないかと思います。感性の違い、視点の違い、気づきの違いなどなど男性のみ、女性のみ状態では得られない動きが生じてくると想像します。この想像は、聖典としての福音書が4つ残されているということからも理解できます。もし福音書がひとつしかなかったとしたなら、私たちのイエス理解はどれほど狭められたものとなっていたのでしょうか。複数の福音書を通して、いろいろな理解、解釈、視点が示されることによって、私たちのイエス様への信仰がより豊かになっていることだと思われませんかでしょうか。同じ様なことが、意思決定機関への女性の参画が今よりももう少し多くなるならば、起きてくるのではないかと思います。そのためには一時期、アファーマティブアクションという行為の実施を、それぞれの場で試みても良いのではないかと思います。

#### ※ 意思決定機関の女性の割合 (2009年度の日本聖公会の統計・58総会期)

	総数	女性	割合
在籍信徒	53,694名	31,585名	58.8%
現在受聖餐者	18,214名	11,720名	64.3%
総会で議決権を有する人 (信徒代議員・主教代議員)	55名	5名	9.1%
常議員総数 (57総会期→58総会期)	9名	1→3名	11.1%→33.3%
管区担当者/諸委員会 (58総会期)	224名	41名	18.3%
主事会 (58総会期)	6名	0名	0%



## プレ宣教協議会に参加して

ジェンダープロジェクト 大岡左代子



今頃、プレ宣教協議会・・・？と、ずいぶん間のぬけた報告となりましたことをおゆるしてください。すでに、各教区でさまざまな機会をとらえて報告がなされていると思います。重複することもたくさんあるかと思いますが、しばらくおつきあいください。

プレ宣教協議会は、昨年（2010年）8月19日～21日に、箱根スコレプラザホテルで開かれました。参加者は、各教区からの派遣者5名（財政担当者、青年、女性を含む）、管区諸委員会、主教会、関連団体（日本聖公会婦人会、GFS）の代表と実行委員をあわせて80名でした。テーマは「宣教する共同体のありようを求めて」。

プレ・女性会議や第1回日本聖公会女性会議を開催した同じ場所でしたが、スクール形式で机といすが並べられている会場はずいぶんと窮屈な印象が強かったです。

（女性会議の時には、96名の参加で今回より多かったです。机といすがその分場所をとっていたのですね。）

今回のプレ宣教協議会は、その名の通り「プレ」であり、2012年に開催される「2012年宣教協議会」の準備として開催されたものでした。その目的は、日本聖公会の現状を分析し、管区および各教区・教会が直面している課題を分かち合い、今日、聖公会に求められている宣教ビジョンの作成を検討する、というものでした（第57定期総会決議より）。そして一昨年の一月に開

催された各教区の常置委員長と宣教担当者の集まりで各教区の課題が分かち合われました。また、管区の諸委員会にも直面する課題を提出するよう求められ、それらが委員会で分析された結果が、当日の10の分科会に課題として挙げられたものでした。それらは、～私たちの信仰をどのように養い、教会と礼拝生活をどのようにして豊かにするのか～という視点からの「青少年と子ども」「宣教の担い手を育てる」「教区、教会の財政」「礼拝と祈りの生活」「組織・教区間協働」、～主イエス・キリストに救われ、生かされている喜びと愛をもって、この世にどのように仕えていくのか～という視点からの「貧困」「高齢化社会を迎えて」「正義と平和」「社会的少数者」「ストレス社会と心のケア」でした。これらは、プレ宣教協議会開催の提案理由に挙げられている日本聖公会の現状である1. 信徒の減少 2. 聖職の不足 3. 財政の危機 という目に見える現象の背景にあるものをさぐる手立てとして挙げられた課題でしたが、考えてみれば教会がもつ持続的な課題でもあるのではないかと思います。基調講演として、西原廉太司祭の『聖公会が大切にしてきたもの』を聞き、あらためて「聖公会とは何か？」を考える機会が与えられました。中でも、私が印象的だ

ったのは、伝統と伝統主義の違いの脈絡で語られたことの中で、伝統とは、イエスキリストの福音を心臓として、そこから動脈のようにして時代を超えて血液が流れてくる lifeline である、という理解と、絶対主義をとらず、聖書・伝統・理性という道標を頼りにしながら解釈し続ける、歩みを続ける、真理を求めて旅をし続けることを聖公会は大切にしてきた、ということでした。また、聖公会の源流であるケルトの霊性と日本人の霊性には深い共通性がある、ということも印象的でした。

2日目の野村アセットマネジメントの榎茂樹さんによる『日本の社会と経済における現状』の話の中では、日本の今後の経済を良くするために必要なことは「女性」がもっと働けるような社会を実現することと言われ、後のセッションで、それは教会でも同じ課題があるのでは？と語られたことが印象に残りました。教会の課題を考えるのに、経済指標からみる分析などは必要ないのでは？という声も会期中間かれましたが、日本社会が直面する課題は、当然教会が直面する課題と重なっていることがあるということを私は、この講演から学ぶことができたと思いました。そして、教会は社会の中で生きているということを実感させられたのでした。

今回は、各教区からの派遣者に女性を2～3名含めるようにとの実行委員会からの要請により約3割が女性の参加者となり、心配された「代表といえばほとんどが男性」という現象は逃れることができました。また、「青年・子ども」の分科会からは、管区の機構改革にまでおよぶようなとても積極的な提案がだされ、「若者がいない」などと嘆くなかれ！と私自身がとても元気をもらった気がしました。残念ながら、ジェンダー課題について分かち合い、語る場はありませんでしたが、多くの方との出会いの中で、これからのつながりをつくる場となったことを感謝したいと思います。「タリタ・クム」を管区事務所のホームページから読んでいます、と声をかけて下さった方がおられてとても励みになりました。2012年に開かれる宣教協議会では、ジェンダープロジェクトがとりくんでいる課題もぜひ分かち合えるように願いたいと思うと同時に、ジェンダープロジェク

トのこれまでのとりくみと今後の課題の中で、今一度、宣教とは何か？ということを考えていきたいと思います。今後、各教区で宣教協議会にむけてのとりくみがなされていくことと思いますが、それぞれの場で、固定化された視点だけでなく、さまざまな視点からの意見交換がなされていくことを期待したいと思います。

(※余談ですが・・・毎夜の懇親会。一日目は参加しそこねた！と、二日目は、はりきって同室の方といざ宴会場へ……。そして、ガラガラ～と扉を開けた瞬間飛び込んできた風景は、「全員男性！」。どうしようかと戸惑いましたが、歓迎してくださる声に甘えて座り込んだものの最初はなかなか居辛いものがありました……。緊張したのはどちらだったかはわかりませんが(笑) 会議室ではお話できない方々と、お話ができる機会となり感謝でした。)





## 第18回聖公会女性フォーラム報告①

松原恵美子（大阪教区）

2010年7月18日（日）、19日（月）の2日間、大阪で「今日までそして明日から」をテーマに女性フォーラムが開催されました。部分参加を含め20人と小規模のフォーラムでしたが、暑い大阪で熱い(?)2日間でした。また、1日目の夕食は高橋さんによるケータリング、2日目の昼食はコリアタウンでの韓国料理と、食事も食い倒れ大阪の名に恥じない内容でした。

テーマ発題は林歌子と大阪婦人ホームについてでした。（第11回のフォーラムを大阪で開催したときは、会場が博愛社のある聖贖主教会でしたので、そのときも、林歌子について学びました）今回は、北川規美子さんが、大阪婦人ホーム、「ジャパン・レスキュー・ミッション」との関わりを中心に発題をしてくださいました。

（くわしくは報告書が出ています）今から100年以上前に聖公会の女性の信徒で当時、虐げられていた女性たちのこと、子どもたちに対して、すばらしい活動をしていた林歌子のことをもっと広めたいと思いました。そして、2日目には、現在の大阪婦人ホーム、今はホーリーホームという名称ですが、その理事長の荒川佐智子さんが発題をしてくださいました。荒川さんのお話の中に林歌子がよく「祈り、忍耐し、涙をながし」という言葉を手紙や詩の中に使っていたそうで、今の女性たちも何かを成し遂げようとするときには、同じ気持ちなのではないかと思いました。

そんな発題を柱にみんなで心を合わせて礼拝し、最後の聖餐式も式服の池本司祭、後藤司祭は汗だくだったと思いますが、様々な思いを分かち合う聖餐式にあずかれました。

女性フォーラムの役割は終わったのではという声もある中で、分科会でフォーラムの意義を確認し、細々とでも続けたいという結論で終わりました。また、今回のテーマ、発題から今を生きる私たちが聖公会という教会の中でどのように生きていったら良いのかを考える機会にもなったと思います。



## 第18回聖公会女性フォーラム報告②

三家丸永子（神戸教区）

今回の第18回聖公会「女性フォーラム」は林歌子氏を通して歴史を振り返るといふことと林歌子氏の社会福祉の理念を受け継いで創立された大阪婦人ホームの働きを知るというものでした。わたし自身は「女性フォーラム」に一度も参加したことがなく、どんな会なのかも知らず、また林歌子氏のことや大阪婦人ホームのことについても全くとっていいほど知識を持ち合わせていませんでした。

猛暑の真っ只中の7月18日、1日目の会場となった大阪城南キリスト教会をめざして鶴橋の駅から、暑さに閉口しながらたどり着いたわたしを北川さんが笑顔で出迎えてくれました。

開会礼拝のあと、高槻聖マリヤ教会信徒の高橋さんご夫妻のケータリングでの心のこもった手料理、とても美味しく戴き、笑顔でのおもてなしに心も体も癒されました。食事の終わったあと、さて一風変わった自己紹介、みなさん自分のプチ自慢をしましょうということで、わたしは笑顔がステキ、話すのは苦手だけど人の話を聞くのは得意なんだけど・・・などおもしろい自慢が出てきて、わたしもつい親バカならぬ猫バカを披露してしまいました。

そして、今回のフォーラムの主題である「林歌子氏を通して歴史を振り返る」として北川さんからのお話で林歌子氏の女性たちのための社会福祉に生涯を捧げた足跡をたどりました。林歌子氏は社会で女性の権利が認められていなかった明治から昭和の時代、貧しさゆえに奈落の生活を余儀なくされている女性たちや孤児たちの救済と自立支援、また廃娼運動の推進のために尽力し、女性の人権獲得のためにまさに戦士のごとく戦った社会事業家です。林歌子氏のこのような偉大な働きを支えたのは自身の祈りと信仰はもちろんのこと、共に祈り、労苦を共にした信仰の友の存在も重要であったということもお話のなかで知りました。たとえば、孤児のための「博愛社」を創立した小橋勝之助・実之助兄弟（ともに神田キリスト教会でウイリアムズ主教より受洗）、日本聖公会婦人伝道補助会の創設に貢献した小宮珠子氏、東京婦人矯風会の会頭の矢島楫子氏など。しかし、このような兄弟姉妹のように社会で名が知られずとも、共に祈り共に働いた兄弟姉妹が大勢おられたらうことでしょう。

また、2日目は林歌子氏の働きを受け継いでおられる現在の大阪婦人ホームの現状について理事長の荒川さんからくわしくお話をお聞きしました。大阪婦人ホームは女性のための救護施設として2007年に創立100周年を迎えられたそうです。貧困やDVなどにより心も体も傷つき、不安の中にある女性たちための一時避難所としての保護救済活動や、また職業訓練などの自立支援活動を行っているそうです。

そして、荒川さんが大阪婦人ホームのボランティア・コーラス指導者として関わるようになった経緯では柔和なお顔つきからはうかがうことの出来ないご自身の苦しみや試練を通して神の救いを真剣に求め続けたこと、そしてその試練の中で神をより近くに感じられたことを証してくださいました。また、林歌子氏の篤い信仰心と尊い働きを受け継いで今日ある大阪婦人ホームのこれからを担っていく働き手としての責務を重く感じているとも言われていました。現在の大阪婦人ホームは行政の影響下にもあるのでキリスト教色をあまり出せなくなっていることを少し残念がられていましたが、ホームにお世話になって自立された方々、ホームの働きに関わってこられた方々のなかには、林歌子氏や荒川さんを通してキリストの福音が大海の一滴ではあつても緩やかに溶け込んでいるのではないかと思います。林歌子氏や多くの信仰の友である兄弟姉妹によって培われてきた福音の種が聖書の中に出てくるからし種やパン種のように大きく成長していることをこの日の聖餐式で読まれた福音書マタイ13:31~33（成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になるからし種や粉に混ぜると全体が膨れるパン種のたとえ話）と重なり、神のなせる業の偉大さを思いました。

閉会礼拝の会場となった韓国キリスト教会館では冷房設備の調子が悪くて急遽、窓を開けて天然温風の中での聖餐式となりました。窓からの突風に準備する傍ら、開放しているドアがパタンと閉まったり、式文がとばされたりとのハプニング続出に、誰かが言いました。これってまるで聖霊みたいだねって…？キリストの復活のあと始まった祈りのコミュニティーもこのようであったのではなかったのかと…。

偉大な信仰の先輩の足跡をたどり、またその信仰を受け継いだ施設の働きを知り、同じ信仰をもった者同士、心を一つにして祈りあい、学びの時だけではなく、それぞれの問題を分かち合い、また美味しい食事をいただきながら楽しく語りあう時も与えられ、外の暑さと同じくらい篤い篤いメッセージを神さまからいただいたような2日間でした。

## 奪われた小さいのちと、その母たちの嘆きと痛みを忘れない 「くるみくるまれるいのちのつどい」

松浦順子（東京聖愛教会信徒）

この不思議な名前を持つ集まりは、キリスト者をふくむ小さな市民のグループです。日本ではハンセン病を患った人たちは、90年にわたる国の隔離政策によって、そのほとんどの人たちが療養所の中でその生涯を送ることを余儀なくされてきました。その中で何が行われていたか、一般社会に知られるようになったのは21世紀に入ってからと言えましょう。病気が「穢れ」の思想と結びつき、とくに戦時中は「浄化政策」の名のもとに「ライ根絶」を目指し、病者が新しい命を生み育むことは決して許されませんでした。男性には断種手術が、女性には強制堕胎が行われました。その実態は2005年、国が設置した「ハンセン病問題に関する検証会議」の報告によってようやく明らかにされました。この時点で全国の療養所に114体の「胎児標本」が残されていることが分かり、厚生労働省はこの年の終わりにこの「胎児標本」の「処理案」として翌年度3月までに一斉に焼却・慰霊することを決めました。十分な実態調査もしないままこの恐るべき負の歴史を見えないものとするに多くの反対の声が上がりました。

そのような中で、一人のキリスト者女性が、何年にもわたって療養所を訪問するうち女性入所者たちの声を直接聴きとっていました。自分の子どもをどんなに無残な形で奪われたか、何人もの女性たちが50年、60年前に経験した苦しみと嘆きを今のこのように語り始めていました。聴きとった女性の呼びかけに応じて、厚労省の「処理案」に反対する小さな会が立ちあげられ、急きょ署名を集め、この「処理案」は一応取りやめになりましたが、最終的には全ての胎児標本は火葬され今は一体も残っていません。

その後、この運動を担った数人はこの歴史的な事実を忘れない、そして今や年若い何人も生存していない母になれなかった女性たちに寄り添いながら、「いのち」のことを考えていくために「くるみくるまれるいのちのつどい」を立ち上げました。活動の一つとして、生きることを許されなかった小さいのちを記憶して多くの人に知ってもらうため、療養所の方たちが身につけてこられた衣類を用いて、産着を縫う作業を始めました。当然ながら針を持ったことのない男性の参加も大歓迎です。出来上がった産着でどのような訴え方ができるか、そのことも考えながら作業を進めていきます。

この集いはまた、かつて療養所で行われた「いのち」への操作は、現代社会と無関係でないことを考えていきます。日夜急激な進化を遂げている医療技術は、人の命の誕生と死を、もはや自然のままにはしておきません。人はどのように生まれ、死んでいくのが幸いなのか、答えは容易に見つかるものではありませんが、共に学びながら、必要とされる時には声を発していくことにしています。

（小冊子、ニュースレターがあります。お問い合わせは松浦まで）

## 女性デスクからのお知らせ

報告 木川田道子

新しい年を迎え、皆さまいかがお過ごしでしょうか。さて、女性デスクから当面の予定のご案内と昨年末にIAWNメーリングリストで紹介されたカナダ聖公会の「暴力を撤廃するキャンペーン」についてご紹介します。

### □ 今年の第55回国連女性の地位委員会と聖公会代表団イベント

(2月22日～3月4日 於ニューヨーク)

毎年日本聖公会からも2名を派遣している国連女性の地位委員会シーズンが近づいてきました。今年の会議の主要テーマは、「女性及び女兒の教育、訓練、科学・技術及び雇用と職業へのアクセスと参画」と、再検討テーマとしては「あらゆる形態の女兒への差別と暴力の撤廃」です。今年で7回目の参加となる日本聖公会からは、今回のテーマに合わせて若い世代から大町はいりさん（北海道教区）と教役者からは三木メイ司祭（京都教区）を派遣することになりました。世界中の女性たちが集まってくるこのイベントにぜひ関心を持って、覚えてお祈りいただければと思います。（第55回UNCSWの詳細については、国連HPをご覧ください。）

<http://www.un.org/womenwatch/daw/csw/55sess.htm>

### □ 今年の世界祈祷日について

☆今年の世界祈祷日は3月4日。

テーマ国はチリです。チリの世界祈祷日委員会の女性たちが、国の現状や日々の暮らし、地域社会の現実を通して選んだ聖書の箇所は列王記上17章18～16節（壺の中にほんの一握りだけ残った小麦粉と瓶の中のわずかな油だけの食糧しかない～それを焼いてしまえばもう自分や子どもの次の食べ物は何もないという極限状態～の中、預言者エリアの言葉を聞き、パンを焼いたシングルマザーの物語）とマルコによる福音書6章30～44節（「5千人の養い」の話）です。

世界祈祷日とは・・・

19世紀末、アメリカの女性たちが主として宣教師の働きを覚えて祈ることから始まりました。毎年、祈りの課題は一つの国、地域に集中されます。その国の女性たちで長い時間をかけて作られた式文は、各国の言葉に翻訳され、私たちはその式文を使って礼拝を捧げます。世界祈祷日は、現在では、教派をこえて世界中に広まっています。参照 HP World Day of Prayer

これらの物語を通して、彼女たちは“**How Many Loaves have you?**” (Loaves とはパンのこと)、“**What are your gifts?**”、“**What can you share?**”と問いかけます。



世界祈祷日の祈りを通して、海の向こうの女性たちの物語に目を向けてみませんか。自分で礼拝を呼びかけることもできます。

＊日本語式文、その国に関する資料等は、NCC 「参照HP World Day of Prayer より」  
女性委員会 (03-3203-0372) にお問い合わせください。

☆世界祈祷日の献金は、各教団・教派で申請した、それぞれが関わっている働きやボランティア団体、NPO 団体、施設などの働きのために用いられます。日本聖公会からは次のように申請しています。(聖公会では女性デスクが申請している)

- ・ 国連女性の地位委員会への派遣費用助成のため
- ・ IAWN (聖公会国際女性ネットワーク) 東アジアグループ地域会議企画チームのため (\*文化的背景の近い東アジアの聖公会女性たちとの連携を目指し、ネットワークづくりを行っていききたいと思います。その一歩としての国内企画会議を行うための助成です。)
- ・ 「くるみくるまれるいのちのつどい」のため (今号松浦順子さんの記事をご参照ください)
- ・ ミャンマー聖公会マザーズユニオンが取り組む「低所得者層のためのシニアハウスプロジェクト (食費援助)」「マイクロクレジットプロジェクト」のため (\*昨年のUNCSW及び聖公会代表団イベントを通して交流のあったミャンマー聖公会のカントリーレポートの中で紹介された女性たちの取り組みの中の一つです。シニアハウスで暮らすお年寄りの方々へのケアを通して、関わっているスタッフもまた入居者から大きな励ましを受けているという報告や、マイクロクレジットプロジェクトが多く女性の自立を促しているという紹介がありました。)

カナダ聖公会～「暴力を撤廃するキャンペーン」を紹介します。

IAWNのメーリングリストより

日本語訳：吉谷かおる

カナダ聖公会では、「女性に対する暴力を撤廃するための16日間キャンペーン(11/25-12/10)」を行いました。私たちは去年、全主教に向けて手紙を送り、聖職たちがこのテーマでの説教をするように促すことを求めました。諸教区の女性グループは、次のように各地での自分たちの関心を反映させたプログラムを用意しました。

- ・西海岸ではオリンピックに先立つ人身売買の課題
- ・北部地域では失踪したネイティブの女性たちに関する追跡調査の課題
- ・都市地域ではホームレスの人々と低額で購入できる住宅の不足の課題

IAWN カナダは、その働きの中心を、ミレニアム開発目標3の女性たちのエンパワメントと、教会における意思決定と計画立案に関する女性と男性の平等を促すACC決議においてきました。

聖書の題材には、社会の中で周縁化されてきた人々へのケアについての言及がたくさんあります。その当時高く評価されていなかった女性たちは、私たちの主からオープンに、また敬意をもって話しかけられました。

貧困については、聖書のいたるところで繰り返し言及されています。それはいまなお人々から力を奪っていますが、その中では女性の数が不均衡なまでに多いのです。このことは、それ自体が暴力の一形式となっています。

多くのいわゆる「成人向け娯楽」は、被害者から力を奪う暴力をともなう虐待的なポルノグラフィです。

貧困、暴力、また災害や戦争からくる損害について私たちが「受容可能なレベル」という言い方をすることも、犠牲者たちの力をさらに奪うことになっています。

どうぞあなたがたのアイデアを携え、この16日間キャンペーンによって、私たちの教会を今日の諸問題に効果的に対処するものにできるように、私たちの手助けをしにいらしてください。

## ジェンダープロジェクトより

新しい年が始まりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。昨年のクリスマス、私は今まで気づけなかった「マリア」の姿に出会いました。「離縁されそうになる少女、旅行中に産気づく初産の女、新生児がいるところに予期せぬ複数の来訪者、乳幼児連れの逃避行、そして乳幼児の殺害命令、その中で新生児養育を成し遂げるイエスの母マリア」渡邊さゆりさんの書かれた文章を通してでした。

「クリスマスのホントウの話とは男児虐殺のテキストの中で、女たちが次々に登場し、ホントウは殺されるべきものが生きる物語」次から次へとたたみかける困難の中にあって、女たちは命に結びつく生き方を静かな知恵で選び取っていく。

ジェンダープロジェクトのメンバーになって2年が過ぎ、たじろぐ私をよそに目の前の扉が次々に開かれていきます。私がどんなに戸惑い尻込みしようとも「命を選ぶ」その群れの中にいるのだと、感じています。今年もタリタ・クムをお届けします。熱が伝わるように、タリタ・クムの思いが伝わっていきますように。

(松村真理子)

### 女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるというとらえ方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもあります。タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

### 正義と平和委員会

#### ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3~4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの方が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたくと願っています。

### タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です(マルコ5:41)。今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかつた女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。